西之内町新調地車
実行委員会通信

2023年
7月号

新調通信に関する御問い合わせ
西之内町会館
０７２-４４４-７７１２

西之内町新調地車
彫刻の物語背景と紹介（２６）
～大坂夏の陣・若江の合戦
木村重成の最後～

暑さ厳しい今日この頃、西之内町の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、今月も新調地車の彫り物に採用した『大坂夏の陣』の物語をご紹介いたします。大坂の陣で人気のある武将の一人である木村重成の物語です。

元和元年五月二日、豊臣軍では河内口から来る徳川軍に対し、大坂城東方、大部隊の機動には適さない低湿地帯で迎撃することにし、木村重成の兵六千が大坂城を出発しました。五月五日、木村重成は今福方面を視察し、こちらに徳川軍が来襲する可能性は低いと予想し、徳川家康・秀忠本営に側面から迫るべく、若江に兵を進めることにしました。

重成は部隊の出陣に際し、香をたきしめ髻に付けました。それを見ていた青木七左衛門らは重成の覚悟の程を感じ、自分自身も身を引き締めます。

重成の前面に姿を現したのは、井伊直孝の軍勢でありました。真田と同じ赤備えでありますが、旗印は井桁であり、彦根の井伊であることは明らかでありました。直孝は先鋒として三浦十左衛門安久と海老江勝右衛門里勝の両名に銃隊を付して、左翼に川手主水良利、右翼に庵原助右衛門朝昌を配置し、直孝自身は本隊五百を率いて、福万寺村へ入り、若江に向かっておりました。先鋒は玉串川を渉り、左翼の川手良利も川を越えて前進しました。三浦安久は堤上より眺め廻し、「あの堤より東で戦うは味方に不利となろう。まずは堤の上の敵を撃ち払うべきと存ずる」と命じて銃隊を整列し、伏せているであろう大坂勢に向かって銃火を浴びせました。大坂の山口弘定、内藤新十郎政勝は井伊の銃撃を受けた為、こちらも用意していた銃隊を前面に立て応戦しました。重成は場所的に田沼が多く通行が限られる堤に誘い出すよう命じていたため、山口らは銃隊を少しずつ退がらせ始めました。これを見た井伊の右翼の川手良利は「敵は色めいておるようじゃ」と颯爽と先頭に立ち「今日は大事の合戦ぞ。一つになりて我に続け！」と叫び前進を開始しました。

木村長門守重成
『大阪落城大戦図』（歌川芳虎）

大坂勢は堤下に潜み、その時を待っておりました。「かかれっ！蹴落とせ！」佐久間蔵人、川崎利泉、牟礼孫兵衛、根来智徳院、平塚熊之助らが一斉に飛び出し槍を繰り出して攻めたてます。井伊の右先手は痛手を蒙り、敗走しました。井伊のもう一人の右手の大将庵原右衛門朝昌は老臣であり、良利の突進を忠告しましたが、やはり良利が苦戦しているのを見て、左手より攻めましたが、こちらも大坂方が堤へと誘い、その術中にはまり激戦苦戦となりました。庵原が周囲を見渡すと、采配を揮う大将らしき武将が目につきました。従士より鉄砲を取り上げて狙いさだめて撃ったのですが、弾は重成の指物にあたり、竿の半ばにて折れ落ちました。重成は一旦装具を整えんと堤下に降りたのを見て、庵原は重成が負傷したものと勘違いをしてしまい、それ今こそだと声を張り上げて突進を命

じたため、どっと押し寄せましたが、重成は落ち着いてすぐさま槍衾を備えて反撃させました。井伊勢は逆を突かれて狼狽し、逃れようとしますが、堤の逃げ道は狭く、討たれる者が続出しました。「退けぃー！」重成は今度も深追いは禁じました。それからしばらくは敵の突進は収まったため、しばし休息をとるよう命じました。弓の名手である飯島三郎右衛門が重成に近寄り、「朝から度々の御戦勝、天晴れの功名と存じ奉る。見渡しまする所、敵の後軍は追々加わって参りましょう。味方の士卒甚だ疲労の色濃く見えますれば、唯今の御勝利の機会に今日の所は御引き揚げなされては如何かと存じますが。」

「此ほどの勝利が何でござろう。まだまだ。これを勝利というは弱者のこと。これにて安堵していては勝利に程遠し。一息入れたれば、さらに当面の井伊を打ち破り、両将軍の旗本に突入して、有無の一戦を決する覚悟でござる。」と重成は答えたのでした。井伊直孝は左右の両先手ともに撃破されたのを見て憤慨し、本隊に進撃を命じました。重成もこの突進を井伊の本隊が攻め込んできたと読み、「総懸りじゃ！」と大声をかけて、木村隊も突進していきました。一旦兵を引いた庵原朝昌は、態勢を整え直して今度も遮二無二突撃していきました。

大坂の山口弘定と内藤政勝は必死に防戦していたが、次第に押され気味となりました。旗本は旗本衆を繰り出し、自らも陣地内を激励して廻っておりました。

青木四郎右衛門、早川茂大夫らが重成に身を寄せ、「後陣の御味方、やや乱れかけて見えますれば、少々後ろにおのきなされます様に。」しかし、重成はこの忠告に耳を傾けず、益々馬を進めて直孝の旗本を見つけるや、そこに向けて突進しようとしました。その勇ましい敵の大将の姿を見つけた庵原朝昌は、馬を駆り立て重成に馳向かい、槍を合わせました。数撃ののち、ついに重成は朝昌の十文字槍に幌をかけられ馬より落ちました。重成が起き上がろうとする所へ朝昌の郎等らが寄ってたかって押さえつけ、安藤長三郎重勝が「その御首みしるしそれがしに賜れ。」と言うも掻き取る事が出来ず、折り重なる様にしてついに重成は首を取られたのでした。

重成の最期を目の当たりにした重成の旗本、従士らはこれまでかと覚悟を決め、皆共に敵陣に斬りこみ次々の最期を遂げていったのでありました。

新調地車の彫り物および本体組立進捗報告

7月に入り木彫山本師の工房では、総仕上げの作業にかかっております。仕上げのイメージとは、言葉では通じる所が非常に難しいものであります。山本師の持つ仕上げのイメージと我々それとが異なることで何度も仕上げ直しをした部位もあります。これは、委員会のメンバーも大変苦慮した点でもあります。

植山工務店さんでは、地車の腰回り、主屋根部分の組み立て工程に入っております。全体の工程の遅れもなく順調に進んでおります。ようやく全体的な大きさも見えてきましたが、細部の決めごとなど、まだまだ仕事は残っております。完成まで残り1か月と少しです。引き続き、ご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

新調委員の独り言

新調入魂式の式典の準備を進めております。他では実績の無いような催し物を企画し、議論して進めております。委員それぞれが、責任感をもち苦労を重ねて進めております。町内の皆さまや南掃守地区祭礼に参加している方々の記憶に残るよう鋭意進めてまいります。あと少しの期間ですが、引き続きご支援をいただけますよう、お願い申し上げます。